

聖書：創世記 48：1～22

説教題：私の羊飼いなる神

日時：2024年7月28日（朝拝）

これまで創世記後半の主人公を務めて来たヤコブにも、ついに地上の生涯を閉じる時がやって来ました。すでに前の章の 29 節に「イスラエルに死ぬ日が近づいたとき」とあり、イスラエルすなわちヤコブはそこで自分の墓についてヨセフに指示しました。それからいくらかの時が経過して、今日の章の 1 節で「お父上が、御病気です」との知らせがあったのですから、これはいよいよ最期の時が来たという知らせに他なりません。さてその時のヤコブはどうだったのでしょうか。私たちもやがてそれぞれ死の日を迎えます。その時、私たちはどうであるか、このヤコブと比べて、ということを考えながら、この章を読みたいと思います。

ヨセフが駆け付けると、ヤコブは力を振り絞って床の上に座りました。それは世を去る前にしなければならない最後の大切な仕事があったからです。それは神の契約、神の約束を子孫に受け継がせることです。ヤコブはまず 3～4 節で、全能の神がカナンの地ルズで彼に現れ、語られた約束を思い起こしています。このルズとはベテルのことです。ヤコブが兄エサウに命を狙われ、一人さみしくパダン・アラムへ逃れようとした時、神はルズすなわちベテルでヤコブに現れて、こう言われました。創世記 28 章 13～14 節：「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのようになり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」 さらに「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」と言われました。それから 20 年以上経って、この地に戻って来た時も、神は同じベテルで彼に現れて、こう言われました。35 章 11～12 節：「わたしは全能の神である。生めよ。増えよ。一つの国民が、国民の群れが、あなたから出る。王たちがあなたの腰から生まれ出る。わたしは、アブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与える。あなたの後の子孫にも、その地を与えよう。」 ヤコブが臨終の床でまず口にしたのは、この神の約束でした。いかにこの神の言葉が彼の心に深く刻み込まれていたかをこれは物語っています。

しかし現実はどうだったでしょう。これはアブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへと受け継がれて来た約束ですが、その約束はまだほとんど現実化していませんでした。確かにヤコブの家族はこの時、70人になっていました。「多くの民の群れとなる」という目標には程遠いものの、この点に関しては進展が見られたと言えるかもしれません。しかし土地の約束はどうでしょうか。約束されたカナンの土地は全然彼らのものになっていません。しかも彼らは今、カナンを離れてエジプトに寄留しています。神の約束実現から逆に遠ざかっているようにも見えます。三世代かかってもほとんど何も起きていません。

しかしヤコブはこの約束を投げ捨てていませんでした。ここに信仰に生きているヤコブの姿を私たちは見ます。そして彼はこの神の約束を自らの子孫に受け継がせようとしています。ヤコブは5節でヨセフの二人の子エフライムとマナセを私の子にする、すなわち養子にすると言います。エフライムとマナセはヨセフの子ですから、ヤコブからすれば孫にあたる者たちですが、ヤコブは自分の息子であるルベンやシメオンと同列の者とすると言います。なぜこうしたのか、その理由や動機についてはっきりしたことはここに書かれていません。しかし後にこの二人を祝福する際、15節で「彼はヨセフを祝福して言った」とありますから、ヤコブの関心はヨセフの祝福にあったと言えるでしょう。歴代誌第一5章1～2節を見ると、本来ヤコブの長子はルベンですが、彼は父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はヨセフに与えられたとあります。また長子は二倍の分け前を受けると聖書に記されています。ヨセフは自分の名に代わって二人の息子がヤコブの子とされることによって、確かに2倍の祝福を受ける者とされたのです。そして7節には愛する妻ラケルの死のことが触れられています。なぜここでこのことが述べられたのでしょうか。ヤコブはこれまでの生涯を振り返る中で、このことを述べずにいられないほど、これは彼にとって大きな痛みであったということでしょうか。あるいは、このラケルからヨセフとベニヤミンの二人が生まれましたが、彼女は早く死んでしまい、それ以上、子を産むことはできませんでした。しかし今ヨセフの二人の子をヤコブの子とすることにより、ラケルから合計4人の子をヤコブは持ったこととなります。このラケルへの思いが、ヨセフの二人の子を自分の直接の子どもとする、としたことの背後にあったということなのかもしれません。

さて、話している最中にヤコブはそこにヨセフの二人の息子たちがいるのに気づき

ました。彼は老齢のために目がかすんで見るができなかったようです。それでヤコブはさっそくこの二人を祝福しようとしします。ここで不思議なことが起こります。ヨセフは長男のマナセがヤコブの右手側に来るように、弟のエフライムがヤコブの左手側に来るように近寄せました。一般に右手の方が勝るという考えがあったことと関係します。ヨセフとしては長男マナセの方により勝る祝福が行くように配置しました。ところがイスラエルすなわちヤコブは祝福する際、手を交差させました。より勝る右手が弟エフライムの上に、そして左手が長男マナセの上に行くようにしたのです。ヨセフはそれを直そうとしますが、ヤコブは祝福の祈りを始めてしまいます。ですからそのヤコブの祈りの言葉の先に見たいと思います。

ここに死を前にしたヤコブの信仰がさらに明らかにされています。彼はまず「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神よ」と呼びかけます。この神が契約の神であることを仰いでいます。神が約束をもってアブラハムとイサクの信仰の生涯を導いて来られました。そして次に、その神によって自分はどうか導かれたかが述べられます。ヤコブは「今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神よ」と言います。ここに前回見た 47 章 9 節とのいくらかの違いを見ることができのかもしれない。彼はエジプトにやって来た直後、エジプトの王ファラオに「あなたのこれまでの人生はどうでしたか」と問われて、「いろいろなわざわいがあり」と答えたことを前回見ました（第 3 版までは「ふしあわせで」と訳されていました）。あの時からこの時まで 17 年の月日が経過していました。ヤコブはエジプトでヨセフとともに平穏な日々を過ごす中で、人生全体をバランスをもって見るようにと導かれたのかもしれない。彼は神は私の羊飼いとせずと私を導いてくださったと告白しています。絶えず私を心にかけて、私を愛し、私を守り、配慮し、養い、育んでくださったと。その彼にはわざわいがなかったわけではありません。16 節最初に「すべてのわざわいから私を贖われた御使い」という表現があります。これは先の神に対する呼びかけと平行関係にあり、これも同じく神について述べた表現と考えられます。これまでのヤコブの人生においては重要な時期に御使いが繰り返し現れました。ベテルでも天使が天と地の間にかけてはしごの上を上り下りする光景をヤコブは見させられましたし、パダン・アラムから帰って来た時も、マハナイルで神の御使いの軍勢を見させられました。そして何と言っても最大のものはペヌエルの出来事です。彼は真夜中から明け方にかけて一人で御使いと格闘するという経験をしました。これらはすべて見える御使いを通して神がヤコブにご自身を現されたという出来事でした。そして注目すべきはここ

に「贖われた」という言葉があることです。これはどういうことでしょうか。これはヤコブのこれまでの生涯には確かに多くのわざわいがあったけれども、神はそこからヤコブを贖い出してくださった、すなわちそれらを良いことにつながるように導いて彼を祝福してくださったということです。色々な悲しみや苦しみ、痛みがあったけれど、それらが全部益になるように神が奇しい仕方で働いてくださった。無駄なことは一つもなかった。人間の目には一見わざわいと見える多くのことがあったけれども、神はそこから私を救い出し、そこから善が流れ出るようにしてくださった。ヤコブは自分の人生を振り返って、このように自分を導いてくださった神を見上げ、神に感謝をささげたのです。

この神が、子どもたちを祝福してくださるように！とヤコブは祈ります。アブラハム、イサク、ヤコブと受け継がれて来た神の契約の中心にあるのは、やがて神は一人の救い主を与え、その方によって、より頼む者たちを救うという約束です。その将来与えられる一人の救い主とはイエス・キリストのことです。アブラハムもイサクも完全な人ではありませんでした。多くの失敗をした人たちであったことが聖書に記されています。しかし彼らは神が与えてくださる約束の救い主を信じ、その方による祝福の人生を歩きました。ヤコブも同じです。彼自身を見るなら多くの欠けがある人でした。しかし彼はアブラハム、イサクが信じた神の約束を自らも信じて歩み、この臨終の床において、一生を振り返り、神がこんな私をずっと私の羊飼いととして導き続けてくださったと感謝しているのです。またすべてのわざわいを益に変えて私を祝福へ導いてくださったと言っているのです。この祝福が子どもたちの上にもあるように！と彼は祈ったのです。「私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼らのうちに受け継がれますように」という祈りは、アブラハム、イサク、そしてこの私にと受け継がれた神の約束が、この子どもたちに受け継がれて行きますように！という祈りです。また「彼らが地のただ中で豊かに増えますように」とは、神がアブラハムに与えた約束が益々彼らにおいて成就しますように！ということです。

さてヨセフは父が右手を弟エフライムの上に置いたのは間違いだと思い、父の手を取ってマナセの上に移そうとしたと 17 節にあります。こっちが長子なのですから右の手はこちらに置いてください！と。しかしヤコブは拒み、「分かっている。わが子よ。私には分かっている」と言って変えようとしませんでした。つまりヤコブはあえて弟により勝る祝福が行くようにしたのです。創世記をここまで読んで来た人なら、

何度も似たようなことがあったことを思い起こすでしょう。カインとアベルもそうでしたし、イシュマエルとイサクもそう、そして何と云ってもエサウとヤコブがそうでした。これらはいずれも神の祝福は人間の考えや人間の常識とは異なるという真理を教えています。この世の考えでは長男の方により勝る祝福が行くという考えは受け入れやすいものです。兄の方も、私が年上なのだから優遇されて当然という感覚を持っているかもしれません。しかし神の祝福はそのような人間的な価値観や上下関係に縛られるものではないということです。それはただ神の一方的な恵みによるということです。ここでは長男のマナセも祝福されると言われています。彼は捨てられるのではありません。しかしより勝る祝福はエフライムの方に行くと言われます。ヤコブ自身、弟の側だったのに、ただ神の恵みにより、地上の人生を導かれました。その恵みの神が、これから後の子孫をも、ただ恵みによって導いてくださることを信じてヤコブは手を交差させたのです。ここに示されているのは、ただ神の恵みに信頼し、感謝し、また期待する彼の信仰だったのです。

最後 21～22 節でイスラエルはヨセフに言います。「私は間もなく死ぬだろう。しかし、神はおまえたちとともにおられ、おまえたちを先祖の地に帰してくださる。」 今、ヨセフはエジプトでエジプト王に次ぐ第二の地位にあり、これ以上ない豊かな生活の中にあります。そんな彼と彼の家族にとって、ここを離れて何も無いカナンに行く必要など人間的に考えればありません。しかしヤコブの心はエジプトの豊かな生活よりも、神がくださる約束の地で生きることの方にありました。またヤコブは、あのシェケムをヨセフに与えよう！と言います。シェケムはヤコブと関係が深い場所でしたが、今そこには別の人たちが住んでいるでしょう。しかし神が将来、そこを含むカナンの土地を与えてくださることを信じて、ヨセフにはそのシェケムを与える！と預言的に語ったのです。エジプトの豊かな生活に目をくらまされることなく、神の約束実現の日を見つめていたヤコブです。そして次の 49 章では他の子どもたち、12 部族の祖となる一人一人に対する遺言、祝福の言葉を語ります。これまで色々あったヤコブですが、その彼がどんなに信仰の人として、その光を輝かせて、その生涯を全うして行ったかを私たちは見るのです。

最初に述べた通り、私たちにも必ず死の日がやって来ます。私たちはみな死に向かって今日を生きています。私たちは死が間近に迫った時、どのような言葉を口にする者でしょうか。その一生を振り返って、ヤコブのように、神がずっと私の羊飼いと

て私を導いてくださったと感謝し、その羊飼いなる神になお深くより頼む幸せに生きる者でしょうか。わざわざその一生に色々あっても、そこから贖い出し、良いものを取り出してくださった神の恵みを覚えて深い感謝と慰めに生きる者でしょうか。この神は私たちのこの世の歩みをそのように導いてくださるばかりか、私たちに与えてくださった救い主を通して死を越えたいのちの祝福に生かしてくださるお方です。救い主イエス・キリストの十字架と復活を通して、より頼む私たちの罪を赦し、永遠の御国での生活へと導き入れてくださる方です。私たちもこの神を知り、この神が私の羊飼いとしてその一生を守ってくくださったことを人生の終わりに深く感謝し、賛美しつつ、その方が永遠のいのちの祝福に生かしてくださることを信じて、平安と喜びを豊かにこの身にいただく者とされたいと思います。またこの羊飼いなる神とともに歩む祝福が私たちの家族に受け継がれて行くように、また愛する方々に新しく与えられるように祈り、自らの生き方と証しの言葉をもってそのことをお伝えし、神の祝福がその方々の上に注がれるための良き道具として用いられることを求めて歩む者とされたく思います。